

「嵐を鎮める」

ルカの福音書 8:22~25

はじめに

詩篇【新改訳 2017】

107:28 この苦しみのときに彼らが【主】に向かって叫ぶと主は彼らを苦悩から導き出された。

107:29 主が嵐を鎮められると波は穏やかになった。

107:30 波が凧いだので彼らは喜んだ。主は彼らをその望む港に導かれた。

107:31 【主】に感謝せよ。その恵みのゆえに。人の子らへの奇しいみわざのゆえに。

今日の箇所は、上記の詩篇に歌われるような、イエシュアが激しい突風と荒波を叱りつけ、これを静められるという、超自然的な出来事です。イエシュアは万物の創造主なる神ですから、いかなる自然の力をも従わせることができになる御方であることが今日の内容から読み取ることができます。私たちの神はこのように強大な力をお持ちなのですから、この御方を信頼し、恐れることなく人生を歩みましょう、というようなメッセージが今日も多くの教会で宣べ伝えられています。しかしこれもヘブル語の最初の言及の視点で読み解くならば、まさに神の国の奥義と言える、秘められた神のご計画を知る御言葉となります。

前回は「燭台のたとえ」が記された箇所でした。明かりとしての火をともし、燭台の上に置くというこのたとえには、やがて復活に与り、天に引き上げられる私たち教会の「携拳」の事実が秘められていると述べました。しかし今日の箇所に記されている、風と荒波を静められるイエシュアの出来事には、結論から言うとその続きとしての、携拳の後、地上に残されたイスラエルの民を襲う大きな患難と、その中で主イエシュアに向かって叫び求めるようになるこの民の姿、そして彼らを苦しめる敵を滅ぼし、イスラエルを救い出すために天から再び降って来られるメシア、イエシュアの「地上再臨」の様子が、神のご計画の「型」たとえとして表されているのです。

神のご計画は「携拳」では終わりません。多くのクリスチャン、教会はやがて天に上げられたそこが「天国」でもう終わりだと考えているようですが、それは全く聖書的ではありません。それでは神がアブラハム、イサク、ヤコブに、イスラエルの子孫に約束されたものが全く果たされないままの幕切れとなり、それでは神が偽りを語り、約束、契約を破ったこととなります。このイスラエル、ユダヤ人、ヘブル人とも呼ばれる彼らの存在は、私たち日本人にとって決して身近な存在ではありません。ですから残念なことにイスラエル以外の国の多くの教会では、聖書に登場する彼らの存在を自分や教会に置き換えて解釈されています。しかし聖書のどこにイスラエルを教会に置き換えて読み取りなさい、解釈しなさいと教えている箇所があるでしょうか。それどころか聖書にはイスラエルに対する神の選びと愛とあわれみの御言葉があふれています。事実、私たちの神は自らを指してアブラハム、イサク、イスラエルの神であると宣言され、イエシュアはユダヤ人としてお生まれになり、ユダヤ人の王として十字架にかかられました。これを変更、または撤回する御言葉は聖書のどこにもありません。私たちの神は永遠にイスラエルの神、主なのです。たとえばあなたの思いや考えにおいてイスラエルの存在が希薄で「うっすらエル、わすれエル、消すラエル」

であっても、主の御心、み旨、そのご計画のど真ん中、その完成はイスラエルを建て直す、イスラエルを再び建て上げることにあり、神にとってイスラエルは「推すラエル、愛すラエル、ああ、イスラエル！」なのです。

この主を信じる私たちが本当に知らなければならないことは、明日の、来年の、将来の自分の人生の計画ではありません。それこそ自然も、全世界も含めた、壮大な規模で展開される神のご計画なのです。そしてその中心にこのイスラエルが予め選ばれ、置かれているのです。神がお選びになったアブラハムの子孫、イスラエル。イスラエルを祝福する者は祝福され、イスラエルを呪う者はのろわれます。地のすべての民族、国民は、イスラエルによって祝福されるのです。これこそまさに「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった（Iコリント 2:9）」ということなのです。神に愛され、神を愛する私たちのために備えられ、与えられるイスラエル、この民を通して現わされる神のご計画について、今日の箇所からよく学んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

1. ある日のこと

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:22 ある日のことであった。イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、弟子たちは舟を出した。

「ある日のこと」と訳されていますが、ここに使われているヘブル語のハツヨーム(דוֹיּוֹם)は本来、神のご計画における重要な「その日、この日」英語ならば This is The Day と訳すべき特別な日を指す言葉です。ですからここは忠実に訳するとしたら「これは神のご計画が成就する『その日』について表したものである」となるべき箇所です。それだけにこの一文は単なる冒頭の状況説明、背景などではなく、注意して読まなければならないものなのです。

では見てまいりましょう。まずイエシュアは「弟子たちと一緒に舟に乗り」ました。「乗る」という意味のヤーラド(יָרַד)は本来「下る、降りる」という意味の言葉で、それは初め天から神が降って来られることを意味する言葉でした。

創世記【新改訳 2017】

11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう…。」

11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

11:7 さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」

11:8 【主】が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。

このように、主はヤーラド、天から「降りて来られ」、自らを神としようとした企んだバベルの計画をやめさせました。この記述、この「バベルの塔」の物語も単なる過去の歴史ではなく、未来に起こる神のご計画

の「型」なのです。すなわち、やがて終わりの日にバベル、すなわち大バビロン、獣と呼ばれる反キリスト、自らを神とする者とその国を、その支配をやめさせる、終わらせる、滅ぼすために神は、王の王、主の主であられるイエシュアはヤーラド、天から再び「降りて来られ」ることがたとえられているのです。それと同様に今日の箇所にもこのイエシュアの地上再臨の事実が、神のご計画として指し示されている、秘められているのです。

そしてイエシュアが乗られた「舟」を意味するオニツヤー(תִּצְיָא)は、これと全く同じ綴りでアニツヤー(אִנְיָא)と読むとそれはなんと「嘆き、悲嘆」という、まったく異なる意味になるのです。

イザヤ書【新改訳 2017】

29:1 「ああ、アリエル、アリエル。ダビデが陣を敷いた都よ。年に年を加え、祭りを巡り来させよ。

29:2 わたしはアリエルを虐げるので、そこにはうめきと嘆きが起こり、わたしにとっては祭壇の炉のようになる。

この「アリエル」とは「シオン」と同じくイスラエルの都エルサレムの詩的呼称の一つです。アニツヤーはエルサレムの神殿とその民であるイスラエルが受ける「うめきと嘆き」を指す言葉なのです。それはイスラエルに敵対する国々によるものです。しかしこの預言にはまだ続きがあるのです。

29:5 しかし、敵の群れは細かいほこりのようになり、横暴な者の群れは吹き飛ばす粉殻のようになる。しかも、それは突然、不意に起こる。

29:6 万軍の【主】はあなたを訪れる。雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって。

29:7 アリエルに戦いを挑むすべての民の群れ、これを攻めて、取り囲み、これを虐げる者たちはみな、夢のようになり、夜の幻のようになる。

このようにアリエルすなわちエルサレムに攻めて来る敵は「万軍の【主】はあなたを訪れる」ということによって滅ぼされます。これはもちろん主イエシュアの地上再臨によって獣、反キリストとその軍勢が滅ぼされるという神のご計画を指し示しています。これはあり得ない話ではなく、神のご計画として必ず起こる、まさにアリエル話なのです。

ですから「イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り…」とは、単なる状況説明などではなく、イエシュアが天の軍勢を伴い、悲嘆に暮れるエルサレム、イスラエルの民のもとに、地上再臨され、彼らの敵をことごとく滅ぼされるという、重要な神のご計画が秘められた、まさに神の国の奥義としての御言葉なのです。

そしてさらに言うならば「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたイエシュアの言葉について、「向こう岸」はエーヴェル(עֵבֶר)、「渡る」はアーヴァル(עָבַר)といい、どちらもイスラエル、ユダヤ人の別称「ヘブル人」を意味するイヴリー(עִבְרִי)と同じ綴りを持った、イスラエル、ユダヤ人を指し示す言葉なのです。つまりイエシュアの目にはただの向こう岸ではなく、ヘブル人、イスラエルの子孫が映っていたのです。

このように、「ある日のこと」ではなく、神のご計画が成就する『その日』には、反キリストに苦しむイスラエルを救い出すために、イエシュアは天の軍勢を率いて地上再臨されます。その事実がこの一文には秘められているのです。まさにこう預言されているとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確か
で真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方
である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

このようにイエシュアが地上再臨される時、私たち教会は「天の軍勢」としてイエシュアにつき従ってと
もに降って来ます。なぜなら前回は述べた携拳によって先に天に引き上げられているからです。つまり私
たち教会はずっと天に引き上げられたままではありません。私たちはイエシュアが行かれるところにどこ
までもついて行き、「いつまでも主とともにいる」者となるのです（Iテサロニケ 4:17）。

そしてさらにさらに言うならば「舟を出した」という箇所に使われているシュート(טויט)は本来、「集
めるために歩き回る（民数記 11:8）」という意味の言葉で、これもまたイエシュアの地上再臨を指し示す
言葉です。なぜならイエシュアはこの時、すべての国々の人々をその御前に集められるからです。こう預
言されているとおりです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

25:31 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。

25:32 そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるよ
うに彼らをより分け、

25:33 羊を自分の右に、やぎを左に置きます。

25:34 それから王は右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世界の基が据
えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。』

このように、イエシュアは「すべての国の人々」を「御前に集め」そして「より分ける」つまり裁くため
に来られるのです。そして右の羊には御国を、左のやぎには悪魔とともに永遠の火を（マタイ 29:41）お
与えになります。このように、今日の最初の一文には、この後の出来事を集約、要約するような重要な内
容が秘められているのです。はっきり言ってこの最初の一文の奥義を理解すれば、後はその繰り返し、補
足にすぎないほどのものなのですが、私たちはこの神のご計画について何度も繰り返して聞き、これを学

ぶ必要があるのです。主は聖書によってそのように私たちを導いておられるのです。では次も同じように
解き明かしてまいりましょう。

2. 危険

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:23 舟で渡っている間に、イエスは眠り始められた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、彼らは水をかぶって危険になった。

8:24 そこで弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。イエスは起き上がり、風と荒波を叱りつけられた。すると静まり、凧になった。

ここでイエシュアは「眠り始められた」とあります。ここに使われているシャーハヴ(שָׁחַב)は本来、以下の出来事で初めて使われました。

創世記【新改訳 2017】

19:4 彼らが床につかないうちに、その町の男たち、ソドムの男たちが若い者から年寄りまで、その家を取り囲んだ。すべての人が町の隅々からやって来た。

これは正しい人、義人と呼ばれる（Ⅱペテロ 2:7）ロトの家に乱暴を働くためにやって来たソドムの男たちが家を取り囲んだという場面で、ここに聖書で最初のシャーハヴがあります。ロトの家族にとってのこの危機的状況は、やはり終わりの日に獣、反キリストとその軍勢に追いつめられるイスラエルの民を指し示す「型」と言えます。「すべての人が町の隅々からやって来た」とあるように、この獣はイスラエルを除く世界のすべての国々を支配し、味方に付けてイスラエルを攻めさせます。この危機的状況を指し示す言葉がこのシャーハヴなのです。

また「彼らは…危険になった」ともありますがここにはサーハン(סָחַן)という言葉が使われています。最初の言及は以下のものです。

民数記【新改訳 2017】

22:27 ろばは【主】の使いを見て、バラムを乗せたまま、うずくまってしまった。バラムは怒りを燃やし、杖でろばを打った。

22:28 すると、【主】がろばの口を開かれたので、ろばはバラムに言った。「私があなたに何をしたというのですか。私を三度も打つとは。」

22:30 ろばはバラムに言った。「私は、あなたが今日この日までずっと乗ってこられた、あなたのろばではありませんか。私がかつて、あなたにこのようなことをしたことがあったでしょうか。」バラムは答えた。「いや、なかった。」

これはなんとも奇妙な出来事ですが、一頭のロバとロバが乗せていたバラムという人との会話です。このバラムはイスラエルを呪うために遣わされた人でした。そのバラムがロバを「三度も」打ち叩きました。

そこでロバは「かつて…このようなことをしたことがあったでしょうか」と言い、ここに聖書で最初のサーハンが使われています。このロバが受けた「かつてないほどのことと、三度の苦しみ」とはイスラエルの民の家であるエルサレムの神殿が三度破壊され、三度失われることを指し示しています。歴史上、今日までユダヤ人たちはこの苦しみを二度経験してきました。一度目はソロモンによって建てられ、バビロンによって破壊された第一神殿、そして二度目はゼルバベルによって建てられ、ローマによって破壊された第二神殿です。やがて終わりの日には三度目の悲劇のためにエルサレムに三度目の神殿が建てられます。そしてこれはよみがえったバビロンの王ニムロデ、獣と呼ばれる反キリストによって奪われ、失われます。その悲劇はまさに「かつて…このようなこと…があったでしょうか」と言わしめるほどのもの、世の終わりの大患難として成就します。

イエシュアの弟子たちはそのほとんどが漁師、しかも今彼らがいるガリラヤ湖の漁師でした。幼い頃からこの湖で暮らし、その隅々まで熟知していたはずです。一日のほとんどを船の上、水の上で過ごす彼らが命の危険を覚えるほどのかつてない風と荒波の恐怖、そこにはやがて終わりの日に起こる大患難、イスラエルの上に降りかかる未曾有の危機が指し示されているのです。

3. 先生

漁師は操船のプロですから、自分たちの力でこの波と風に抗おうとしたことでしょう。しかし万策尽き、イエシュアに助けを求めます。弟子たちはここでイエシュアを「先生」という意味でモーレ(מורה)と呼んでいますが、聖書で最初のモーレはそのような意味ではありませんでした。

創世記【新改訳 2017】

12:5 アブラムは、妻のサライと甥のロト、また自分たちが蓄えたすべての財産と、ハランで得た人たちを伴って、カナンに向けて出発した。こうして彼らはカナンの地に入った。

12:6 アブラムはその地を通過して、シエケムの場所、モレの榿の木のところまで行った。当時、その地にはカナン人がいた。

12:7 【主】はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」アブラムは、自分に現れてくださった【主】のために、そこに祭壇を築いた。

主はイスラエルの父祖アブラムを選び出し、カナンの「モレ」に連れて来られこう言われました。「あなたの子孫にこの地を与える」と。このように「先生」と訳されたモーレには主のイスラエルに対する土地の約束が指し示され、秘められているのです。ですからこの時弟子たちは「イエシュア」とも「ラビ」とも「主よ」とも言わず、イエシュアの地上再臨の目的が、主のアブラムに対する約束を果たし、イスラエルの民に土地を与え、これを所有させることにあることを示して、彼らに「モーレ、モーレ」とこのように預言的に言わせたのです。

そしてイエシュアが起き上がり、風と波を「叱りつけられ」ました。「叱る」という意味のガーアル(גער)は本来、イスラエルの11番目の息子であり、父に最も愛されたヨセフの見たその夢を指し示す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

37:9 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。

37:10 ヨセフが父や兄たちに話すと、父は彼を叱って言った。「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拜むというのか。」

37:11 兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心にとどめていた。

ヨセフの見たこの夢は、一部はこれを実際に見たヨセフ本人がエジプトの宰相となった時に成就しましたが、やはりそれも「型」であり、その完全な現れは、ヨセフの子（ルカ 3:23）と呼ばれたナザレのイエシュアが、イスラエルのメシアとして地上再臨され、イスラエルの民に迎えられる時にこそ成就します。まさに太陽と月の下にある地上のすべての国々の民がイエシュアの前にひれ伏し、聞き従うようになるのです。「叱る」という意味のガーアルにはそのような神のご計画が秘められているのです。

4. 信仰はどこに

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:25 イエスは彼らに対して、「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」この御言葉は今日の私たちにも問いかけられています。ぜひ今日解き明かされた内容に沿って考えてください。この時の弟子たちはその信仰を置くべき場所が正しくなかった、そもそも信仰自体がなかったので「驚き恐れ」たのです。人は見えないこと、聞こえない、聞いたことがない、理解できない物事に対して恐れを抱くのです。あなたはどうか？あなたの信仰はどこにありますか？どうか聖霊により、御言葉により、私たちの信仰がいつも神のご計画の成就、完成である「神の国」におかれませう。そしてこれに対する理解が、知識がさらに深められ、増し加えられますように。

そしてイエシュアとは「どういふ方」ですか？これも今日解き明かされた内容に沿って考えてください。イエシュアはイスラエルの王、イスラエルの主であり神の御子メシアです。どうかこの御方をあなたのおちっぽけで虚しい願いや欲求を満たすための存在にしないでください。そしてあなたの方こそ、このイスラエルにつながり、その永遠の祝福に与る者として、ユダヤ人の王イエシュアに選ばれた存在であることを知り、覚えてください。どうか私たちの信じる神が、イエシュアがお選びになったイスラエルという存在に対する私たちの霊的な目と耳が、これからもますます開かれていきますように。イエシュアの御名によって祈ります。アーメン